

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』における
ナジャの不在

Absence of Nadja in *Nadja* of André BRETON

加藤 彰彦

Akihiko KATO

四天王寺大学紀要
第67号 2019年3月

(抜刷)

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』におけるナジャの不在

Absence of Nadja in *Nadja* of André BRETON

加藤 彰彦

Akihiko KATO

[要旨]

アンドレ・ブルトンの『ナジャ』において、ナジャの物語の最後でナジャの不在を意味するブルトンの発言がある。ナジャの不在とはいいいながらも、ナジャが実在した人物であることは明らかになっているが、それでは何故ナジャの不在が語られるのか。それについて考察したのが本論考である。第一部において、ジェラルール・ジュネットの物語論に依拠しながら、語り手と聴き手の位置関係に注目し、当初は語り手であったブルトンが、本来聴き手であったナジャに取って代わって最終的には聴き手も兼ねるという一人二役を演じている構造を明らかにし、ナジャの不在をテキスト上から論証した。次に、第二部において、ラカンの理論を援用しながら、ナジャはブルトンの自己同一性のための鏡像であること、更にヒッチコックの『サイコ』を例にとりながら、主体が対象と同一化し、対象が消滅しても、超自我的な声によって支配される点を明らかにし、ブルトンはナジャの消滅後もナジャの声によって支配され、それによって主体として維持されるという風に結論付けた。

[キーワード]

アンドレ・ブルトン 『ナジャ』 ナジャの不在

ジェラルール・ジュネットの物語論 ヒッチコックの『サイコ』

序章

アンドレ・ブルトンによって書かれ初版は1928年、改訂版は1963年に刊行された『ナジャ』の中心部分を占めるナジャの物語の最後において「誰だ。私だけなのか。私自身なのか。」(PI p.743)¹⁾という言葉投げかけることで終わることから、ナジャは実際にいたのかという疑問が出てくるのは当然のことであった。これに対してマルグリット・ボネは、ブルトンとナジャが初めて出会った場所を特定し、ナジャがブルトンに送った手紙があることを明らかにするとともに、ナジャの晩年がどうであったかについても詳細に記しているのである²⁾。従って、ナジャは実際にいたのだということについては、最早疑問の余地のないところだろう。ところが一方で奇妙であるのは、『ナジャ』という題名であり、ブルトン自身1962年の改訂版において新たに付された「序言」で明らかにしているのであるが、「多数の写真による図解が全ての描写を除去することを目的としている」(PI p.645)と明らかにしているにも拘らず、ナジャの写真が一枚もないという事実である。その代わりブルトンはブランシュ・デルヴァルという女優の写真を入れていて、おまけにこの女優は自分こそナジャであると公言しているのである。これは事実ではなく、ナジャとは別人なのであるが³⁾、ナジャ本人の写真を載せず

デルヴァルの写真を載せているのであるから、誤解を招くことになっても仕方のないところだろう。

またテキストを読んでいて奇妙な印象を持つことになるのが、ブルトンにはあたかもカメラを携えてナジャとの関わりを同時進行的に描写しているかのような記述方法を採用しているのであるが、その際ナジャとブルトン以外の別の人物との関わりが一切描写されないし存在しないのだ。『ナジャ』はシュルレアリスムの小説と銘打たれているのであるから、普通の小説と違っていても何らおかしくはないのであるが、通常見られる他の登場人物との関わりが『ナジャ』の中にはないのだ。確かにナジャ自身の語る話としてある出来事があったとブルトンによって語られることはあるのだが、他の登場人物との関わりをブルトン自身が目撃することはないのだ。ここには共同主観性の問題があると言えるだろう。つまり我々が何かを見たと思ったが自信がないとか、いささか奇妙であるという印象を持った場合、そこにいる他の誰かによって同じ内容の言葉が聞ければ、自分の見たものは間違いなかったという確証が得られるのである。もちろん厳密に言えば共同幻想ということもあるので、絶対正しいという言い方をすることはできないが、日常生活のレベルにおいてはそれなりの確かさを得ることができるのである。この共同主観性を念頭に置いた上で、我々は一つの映画と一つの推理小説を持ち出してくることができる。映画の方はヒッチコックの『バルカン超特急（「婦人が消える」が原題）』で、これはある列車の中である女性がいつの間にか姿を消してしまうというのが物語の発端となる。この女性が消える前にこの女性に出会っていた若いイギリス娘はその行方を探そうとするのであるが、乗客たちはそんな女性は見なかったと言うのだ。ここにおいて間違っているのは自分の方だと思ってしまうのである。同様の事例はコーネル・ウルリッチ（ウィリアム・アイリッシュ）の『幻の女』という小説であって、これはある夜主人公が外で知り合った女性が自分が犯人にされてしまった殺人事件の無実を明らかにしてくれる証人ということで、その女性を探そうとするのであるが、その女性と二人で過ごした時間に近くにいた全ての人がそんな女性は存在しない、あの時はあなた一人でしたという証言をするのである。この場合殺人事件の犯人にされているということから、女性を見つけることはそれこそ生死に関わる問題となってくるのである。ラカンならここで「女性は存在しない」という自らのテーゼを持ち出してくるだろうが、我々がこの映画や小説の事例に関心を持つのは、我々の認識というのとはどこか脆いものであって、根拠、この場合は他人の承認を求めるという傾向にあるということと、それでもつまり他人の承認がなくても、自分の認識はそれとして自らの主体性の確立に役立つのではないかという、揺れ動く事態を想定しているからである。他の人たちがそれも全員一致という形で、当の女性はいなかったと証言していて、それが正しいとするなら主人公の方が正気ではなかったということになる。そこまで言わないにしても、ちょっとした勘違いであったという可能性はある。ところが『バルカン超特急』の場合、消えた女性が窓に書いた文字があって、これも確かに消えてしまう運命にあるのだが、物証的なものが存在するとやはり単なる勘違いでは済まなくなる。ここにおいて他人が信用できないとなるとどうするか。ここに出てくるのがラカンの言う大他者であって、他人は信用できないかもしれないが、大他者はちゃんと見てくれているというもので、映画においても小説においても件の女性は存在したのが最後に明らかとなる。

ここで『ナジャ』に話を戻すと、『ナジャ』という小説においてブルトン以外にナジャの存在を認識している登場人物が存在しないという事態は、我々を不安にさせる。全てはブルトンの妄想であったのだとしても、何ら不思議はない。この点については、同様に謎の女性を扱っている「新精神」と対照的である。これは街中でブルトンとルイ・アラゴンそしてアンドレ・ドランがある女性を見たと言って、それぞれが興奮気味に語るののであるが、他の二人も自分も見たと言ってその時の体験を語るのである。ブルトンとアラゴンは気になってその後街中をくまなく駆け回るのであるが、徒労に終わってしまう。街の女の子は全て知っていると豪語するアンドレ・ドランだけがこの捜索に加わらなかったというのが興味深い、結局見つからなかったということで、この女性は謎の女性となるのである。謎の女性というわけであるから、当然素性についても明らかになっていないのであるが、それでも謎の女性として認められるのは、ブルトン、アラゴン、ドランの三人によって別個に認識されているという事実があるからである。ブルトンだけの体験となれば、へたをすればブルトン自身による作り話と受け取られかねない。そしてそのような危うさのようなものが『ナジャ』にはあるのであって、マルグリット・ボネの研究、そして『ナジャ』においてもナジャの物語の後ブルトンのナジャへの介入もしくは干渉がナジャの精神錯乱をもたらしたのではないかと恐らくはブルトンの知人たちの批判的言及から、ナジャの存在というのは明らかであり確かなものであるにも拘らず、ナジャの物語を読むことによってナジャの不在という印象を持つことになるのは何故かということと、更に言うなら、ブルトンは「序言」において「《ありのままに取られた》資料を全く歪曲しない」(PI p.646) という思いを明言しているにも拘らず、そして事実ナジャは存在し、ブルトンはそのナジャとの逢瀬を繰り返していたにも拘らず、ナジャは存在していないかのような書き方をしたのは何故かということである。

第一部 物語論からナジャの不在を明らかにする

第一章 何故ブルトンは自由間接語法を多用しているのか

1926年の10月4日ブルトンが初めてナジャと出会った時のことである。「彼女はマジヤンタ通りの美容院に行くと、彼女は言い張っている（私は彼女が言い張っていると言っているが、それはその時私はそれを疑っているからであるし、彼女は後で何の目的もなく歩いていたと認めざるを得なかったからである。）」(PI p.685)

ここにおいてナジャの発言内容は間接語法的に表現されているが、ブルトンの主観が入った表現になっている。この後ブルトンとナジャは、北駅近くのカフェに入って話をすることになる。「我々は北駅近くのカフェのテラスに立ち寄る。私は彼女をもっとよく見つめる。この眼の中にかくも異常なものが通り過ぎるということがよくあるのか。漠然とではあるが困窮と同時に鮮やかに誇りに満ちた何かがそこに映して見られるのか。私にそれ以上尋ねることなく、間違っって置かれたかもしれない（あるいはそうではないのか）信頼とともに彼女が私にしている告白の始まりが提起しているのもまた謎である。リールで、彼女の出身の街で彼女はたった二三年前にそこを出てきたのだが（後略）」(PI p.685)。

ここにおいてナジャの告白内容は自由間接語法で語られているのだ。ブルトン自身『ナジャ』

において自由間接話法しか使っていないというわけではなく、ナジャが自身の名前を明らかにする時も直接話法が使用されているのだ。ナジャがパリに出てくるまでの出来事については当然ナジャ自身によって語るしかないのであるが、それをそのまま直接話法にしているのは小説を読む側からすれば、誰が語っているのか、つまり語り手はブルトンではなくてナジャなのかという思いにとらわれるという事態を回避したのだらうとも思われる。この後ナジャの故郷での話が續くのだが、突如次のような文章になる。「ナジャがパリでしていること、しかし彼女はそれを自問するのだ。そうなのだ、晩七時頃、彼女は地下鉄の二等の車輦にいるのが好きなのだ。乗客のほとんどは仕事を終えた人たちである。彼女は彼らの間に座り、彼らの心配事の対象に確実になり得るものを彼らの表情に見つけようとする。彼らは明日まで、たった明日までに残してきたばかりのもの、そしてまた今晚彼らを待ち続け、彼らを陽気にするか更により気がかりにするものを必然的に考える。」(PI p.687)

これこそまさに自由間接話法であって、話の流れからすればナジャ本人の考えていることになるはずだが果たしてそうか。次に10月5日にブルトンは自分の書いた本をナジャに手渡し、ナジャがそれを読んだ時のことである。「彼女をうんざりさせるところか、彼女が最初はざっと読み、次いで非常に注意深く吟味しているこの詩は、彼女を激しく感動させているように思われる。二つめの四行詩の最後で、彼女の眼は濡れ森の光景で一杯になる。彼女はこの森の近くを通る詩人を見、遠くから彼について行くことができるようだ。」(PI p.689)

まだ初めの部分はブルトンがナジャを観察した上での記録であるとすることは可能だし、それで十分なのだが、ナジャが声に出して詩を読み、その都度感じていることをブルトンに語ったとして、ここで自由間接話法が成立するわけだが、ナジャの語っていることをそのまま再現したとなれば、あまりに説明的でどうしても無理があるだろう。つまりここにおいてブルトンはナジャの内面に入り込んでいるということであり、表現しているのはまさにブルトンであるのだ。また10月6日の記述においてブルトンとナジャがパリの中を歩いていた時、コンシエルジュリの近くでナジャはある窓に言及するのだ。「我々が鉄柵に沿って再び進んでいくと突然ナジャは更に先に行くことを拒絶する。そこ、右側には、堀に面して下の方に窓があり、それから目を離すことは彼女には最早不可能なのだ。絶対に待たなければいけないのは使用禁止のように見えるこの窓の前でなのだというのを彼女は知っている。全てがやって来ることができるのはそこからなのだ。全てが始まるのはそこなのだ。」(PI p.697)

この最後の部分が自由間接話法であって、ナジャが窓について知っている内容を明らかにしたものと受け取れる。しかし必ずしもそうだとは言いきれないところがあって、つまりある程度の事情を諒解したブルトンが、語り手として介入して窓についての事実関係に言及したとも取れるのだ。10月7日の最後近くの箇所、ナジャの経済状態が芳しくないことが語られるのであるが、次のように表記されている。「お金が彼女から逃げていくのはあまりにも確かだ。彼女にはすぐにいくらの金額が必要なのだろうか。五百フラン。今私には持ち合わせがないが、翌日彼女にそれを渡すと申し出るや否や既に彼女にあった全ての不安は消え去ってしまった。」(PI p.703)

この金額についてのやり取りの部分が自由間接話法で、金額を尋ねているのがブルトンで、

金額を答えているのはナジャである。しかしここまで来るとはっきりそうだとも言えない。つまりブルトン自身の内心で、これくらい渡せばいいのではないかという計算が出てきているということかもしれないのである。この自由間接話法の多用から指摘されるべきことは、語っているのは誰かということである。確かにブルトンは語り手として存在しているわけであるから、語っているのはブルトンであるとするのは正当である。ところが、そこで示されている発言内容はまさにナジャのものであるとすれば、直接話法でも間接話法でも十分なはずであるし、実際テキスト中においてはこれらの話法も使用されているのだ。ところが自由間接話法となると、ただ単に接続詞とか伝達動詞が省かれるとか、人称や時制などが間接話法と同じようになっていくという、文法的なことを指摘するだけでは十分ではないのである。語り手としての話の流れを維持するために自由間接話法を使用しているのは、10月4日の記述から明らかであるが、次第にこれを語っているのはそもそもナジャであったのか疑わしいと思える箇所が出てくる。それはナジャの発言内容をそのまま伝えていこうとするにはいささか無理があるのだ。つまりナジャの思いを伝えるという形をとりながら、ブルトンはナジャに関する自分の思いを語っているのではないかということである。それならばブルトンが「序言」で明らかにしている「《ありのままに取られた》資料を全く歪曲しない」(PI p.646)とするブルトンの考えに反するのではないかという批判も成り立つことになるのである。ここにおいて、ブルトンの自由間接話法が何ら勝手な作り話を可能にしているものではないとするなら、ブルトンはナジャの直接語っていることだけではなく、直接は語っていないけれども、ナジャならこういうことを言いたいのではないかというブルトンの思いを込めたものとして理解することができる。特に10月12日の記述において、「私は彼女の独り言に付いていくのにだんだん苦勞するし、長い沈黙は私を理解不能にさせ始める。」(PI p.713)と書く以上、ブルトンがナジャの言ってみればバラバラな言葉の群れをある程度整合性を持った認識し得る状態に持って行くためには、ブルトン自身の介入が必要であったということは言えるのだ。つまりナジャの言わんとするイメージを提示するため、ブルトンはナジャの立場に立って、それがあたかもナジャの口から出たものであるかのように表現する必要があったのであり、自由間接話法はそのための一つの手段だったのだ。

第二章 ジェラルール・ジュネットの物語論における語り手について

ブルトンによって書かれた『ナジャ』のテキストが事実に基づいているかどうか、ブルトンは何故事実に基づいているとはいいいながらも、そうではないかのような印象を与える書き方をしているのかについて、我々がこれから語り手の構造について明らかにしていこうとする際に参照することになるジェラルール・ジュネットに、次のような考えがある。ジュネットは『フィギュールⅢ』において「物語の言説」を明らかにしているのであるが、この「物語」(récit)には三つの意味があるのだと言う。この三つめの意味について次のように書いているのだ。「明らかに最も古い三番目の意味において、物語(下線原文)は今尚出来事を意味している。しかしながら最早人が物語るそれではなくて、誰かが何かを物語ることにあるそれなのである。それ自体において捉えられる物語るという行為なのである。」(FIII p.71)

このジュネットの考えは、我々がこれから語り手の構造について明らかにしていこうとする

上で前提となるものである。つまり『ナジャ』において、ナジャは実在したのかとか、ブルトンとナジャの関係はどうであったのかを問題にする以上に、恐らく我々が注目しなければならないのは、ブルトンは何故『ナジャ』を書いたのかとか、何故ナジャが不在であるかのような書き方をしたのかということなのである。従って我々がこの論考において明らかにしなければならないのは、ナジャの不在を現実のこととして捉えるのではなく、テキストとしてどのようなになっているかということである。これはジュネットが次のように述べていることから明らかとなるだろう。「従って第22の歌が求婚者たちの虐殺に当てられていると言われているように、『オデュッセイア』の第9から12の歌はユリシーズの物語に当てられていると言われるだろう。彼の冒険を物語ることは彼の妻の求婚者たちを虐殺するのと全く同じように一つの行為なのであって、これらの冒険の存在が（ユリシーズのように、それらを現実のものと捉えたと仮定してだが）この行為に全く依存していないのは言うまでもないとしても、物語的言説、それ（第一の意味におけるユリシーズの物語）は、絶対にこの行為に依存していることは全く同様明らかであって、全ての言表は言表行為の所産であるように、それはこの行為の所産（下線原文）だからである。逆にユリシーズを嘘付きととり、彼の物語る冒険を虚構であるとするなら、物語的行為の重要性は増すしかなく、何故なら言説の存在がただ単にその行為に依存しているだけではなく、それが《報告している》行為の存在的虚構もそれに依存しているからである。」（FIII pp.71-72）

このジュネットの考えは、そのまま『ナジャ』に当てはめて考えることができるだろう。ここにおいてナジャが実際に存在したかどうかの不毛な検証は我々の議論の対象とはなり得ないが、ナジャをどのように語るかについては大いに問題にすべきなのである。つまりナジャが実在し、かつブルトンとナジャは出会い逢瀬を重ねたという事実があれば、それを報告する物語が一様に固定されて存在するというわけではないのだ。これは、ナジャとはどのような存在であったのかという解釈の問題ではないのだ。つまりある事実に対してどう立ち向かうかというあり方の問題として捉えられるということだ。この語りの主体である語り手について考察を加えたジュネットに従って、我々は『ナジャ』の語りの構造を明らかにしていくことになるが、『フィギュールⅢ』においても明らかにされているようにこの問題を取り上げたのはジュネットが最初というわけではない。例えばサルトルはフランソワ・モーリヤックについてあたかも神の立場から書いているとして批判をしているし、自伝的な作品となれば、主人公が自らの物語を語るということになるのも容易に理解できるところだ。また一人称で語られるからといって、語り手は全てを理解しているというわけではないのは、例えば推理小説の探偵を考えてみればわかりやすい。更に主人公が物語を語るに限らないのは、シャーロック・ホームズシリーズに出てくるワトソンを思い浮かべればいいわけであるし、更に距離を置いた存在として『華麗なるキャッツビー』を想起すればいいのだ。ところがこのようにして思いつくままに語り手と物語内容の関係に言及しても、ジュネットによれば混同されている部分があるというのだ。我々はここにおいて物語論の正当性について検討することなく、ジュネットの物語論に従って論を進めていこうと思う。ジュネットによれば「その語りの水準（物語世界外か物語世界内か）」（FIII p.255）と「物語内容に対する語り手の関係（異質物語世界か等質物語世界か）」（FIII p.255）

に注目することによって、「語り手の地位」(FIII p.255)が明らかになるという。これにより四つの基本型が出来上がるのである。ここにおいて物語世界外とか物語世界内あるいは異質物語世界とか等質物語世界といった用語には説明を要するだろう。ジュネットの説明によれば次のようになっている。「我々は物語によって語られた全ての出来事はこの物語を作っている語りの行為が位置している水準よりすぐ上にある物語世界的水準にある(下線原文)ということである。この水準の違いを定義するだろう。虚構の『回想録』のルノンクール氏による執筆は第一の水準で成し遂げられた(文学的)行為であって、これを物語世界外(下線原文)と呼ぶことになるだろう。この『回想録』において語られている出来事は(その中にはデ・グリューの語りの行為もある)この第一の物語の中にあり、従って物語世界(下線原文)、とか物語世界内(下線原文)と規定するだろう。」(FIII p.238)

更には「従ってここにおいて二つの型の物語を区別することになるだろう。一つはそれが物語っている物語内容の中に存在していない語り手のもので(例、『イリアド』におけるホメロス、あるいは『感情教育』におけるフロベール)、もう一つはそれが語っている物語内容において登場人物として存在している語り手のものである(例、『ジル・ブラース』、あるいは『嵐が丘』)。私は第一の型を、明白な理由から、異質物語世界(下線原文)、そして二番目を等質物語世界(下線原文)と名付ける。」(FIII p.252)

このように語り水準による区別二つと物語内容に対する語り手の関係による区別二つのそれぞれ二つずつの組み合わせで、四つの型が出来上がるわけである。つまり異質物語世界と物語世界外という水準から一つめの異質物語外の型、等質物語世界と物語世界外の水準から二つめの等質物語世界外の型、異質物語世界と物語世界内という水準から三つめの異質物語世界内の型、最後に等質物語世界と物語世界内の水準から四つめの等質物語世界内という型が出来上がるのである。そしてここから見出される作者、語り手、主人公といったそれぞれの立場から生じる距離は、ただの役割分担ということではなく、「私」自身の発言ではありながらもある種客観的な立場から語っておきたいという必要性に基づくのである。

第三章 『ナジャ』においてナジャはブルトンである

ジュネットの物語論によって語り手の構造という観点から『ナジャ』を見ることにしよう。『ナジャ』の語り手というとブルトンが、そしてブルトンのみが考えられるのであるが、厳密に言うところではなく、ナジャも語り手として存在しているのだ。既に触れたようにブルトンは『ナジャ』のテキストにおいて自由間接話法を多用しているのであるが、全てが自由間接話法から成り立っているわけではなく、直接話法も使用されていて、そこではナジャが自らの過去や知り合いについての話を長々と語るのである。もちろん同じように語り手といっても、その立場には違いがあるのであって、ブルトンはテキストを構成することができるが、ナジャにはそれができないということである。従ってブルトンは物語世界外にいることになる。ただ『ナジャ』においてもナジャの物語が始まる前の段階と始まってからでは位置が異なるのであり、当初は異質物語世界的ではあったが、物語が始まると主人公となるわけであるから、等質物語世界的に移行するのである。

次にナジャであるが、ブルトンによって語られる物語の中に登場するということから、物語世界的でありかつ等質物語世界的である。ナジャの語りは思い出や独白という形をとっている。従ってブルトンは異質物語世界外の型から等質物語世界外の型に移行し、ナジャは等質物語世界内の型に在るのだ。これを人称によって表わすとブルトンは「私」(je)であり、ナジャは「彼女」(elle)そして「君」(tu)ということになる。これはブルトンの位置しているところが、物語世界外か世界内かの区別から生じるのであって、ブルトンを中心にして考えれば当初は距離があったために「彼女」(elle)となるが、対面して話すことになると「君」(tu)ということになるのだ⁴⁾。ここで注意しておかなければならないのは、ナジャはブルトンによって「君」(tu)と呼ばかけられることによって、語り手であると同時に聴き手としての立場を持つことになるのだ。むしろこの『ナジャ』においては、ナジャの聴き手としての立場も重要視されるべきであるかもしれない。また『ナジャ』においてはそれこそ冒険的な出来事が出現するわけではなく、専らブルトンとナジャとの会話、更に言うならブルトン一人の語りによって成立しているということにも目を向けるべきなのである。というのもブルトンはナジャの言っていることがよくわからないと言出すからである。このようになると、ブルトンがナジャに語っているということでのテキストが成立すると言えるのか、あるいはブルトン自身が一人で敢えて言えば自分自身に語っているのではないかということにもなるのである。誰が語っているのかということについて、それはブルトンであるというのは揺るぎないように思われる。

ところがナジャの物語の最後においてかなりの事態の異変が起こるのだ。ブルトンはナジャの精神錯乱という事態を受けて、ブルトン自身も精神科医であったということから精神医療のあり方の問題点を指摘するのであるが、そもそもの出発点として正気と狂気といった区別を認めないのだ。これは『シュルレアリスム第二宣言』において、階層秩序的二項対立の無効を明らかにし、それを抹消してしまうことこそシュルレアリスムの務めであると明言しているブルトンなら当然のことだろう。そしてそれに続けてブルトンは次のように書くのだ。「最も異論の余地のない真実よりも限りなく真意がはっきり見て取れ重要性に満ちた詭弁がある。それらを詭弁として無効にすることは重大さと同時に面白味のないことなのだ。」(PI p.741, p.743)

つまりブルトンはこれから言うことが詭弁として受け取られることを承知しているのだ。「仮にそれが詭弁であったとしても、私が私自身に対して、私自身を迎えに最も遠くからやって来ている人に対して、《誰だ》という、相変わらず悲痛な、叫び声をあげることができたのは少なくともそのおかげなのである。誰だ。あなたなのか、ナジャ⁵⁾。彼岸(下線原文)、全ての彼岸がこの世にあるというのは本当なのか。私はあなたの言っていることが聞こえない⁶⁾。誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)

「誰だ。」の最初は直接話法であり、二つめの「誰だ。」からは自由間接話法になっている。テキスト中における会話であって、読者に対して投げかけられたものではなく、ブルトンはナジャに対して話しかけているのである。そしてナジャに対して「私一人なのか。私自身なのか。」と問うているわけで、これは要するに「ナジャは私なのか」ということである。ブルトンのある意味偽装された驚きのもとで、ナジャの物語はここにおいてその秘密を明らかにするのである。つまり語り手であるブルトンがテキストにおける登場人物であり聴き手でもあるナジャと

の同一化ということである。このように考えるならば、ジュネットにおける語り手の関係は次のように変化することになる。当初異質物語世界外であったブルトンが等質物語世界外に移行したのは既に見たところだが、等質物語世界内であったナジャはこのブルトンと同じく等質物語世界外に移行し、ブルトンと等号で結ばれることになる。ここにおいてナジャとは偽装されたブルトンであり、最初から最後まで実はこの二重の関係は成立していたのだ。そして問題とすべきは単に物語の中で人格の変化があるという話ではなく、結局のところブルトンもナジャも物語世界外の存在であるということから、物語との距離が認められるということなのだ。当然のことながら、ここで認められているブルトンとは生身のブルトンと同一ではない。ましてやブルトンとナジャとが同一人物であったということでもないのである。語り手であるブルトンが目指したのは、現実には無理であっても、たとえ物語の世界でいいからナジャになり切ることでなければ、ナジャの真の姿を明らかにして、そこに一步でも近付きたいということでもないのである。事實はむしろ逆であって、自らの中にナジャたる存在を作り上げることなのだ。ナジャについての物語を語るというのはその作業であって、ここにおいて語ることの必要性が出てくるのだ。『ナジャ』の冒頭において「私は誰か。」(PI p.647)という問いかけが為され、あたかもそれに対する回答であるかのように「誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)という問いかけが為されるということは、既に現実にある何ものかを見つけ、それを自らの代わりとして置くことではなく、自分自身の中にある何ものかを探し出すとともに、そこに何ものかを作り上げることなのである。これはジュネットの語り手の構造において、ブルトンが物語中においても不変の位置を占めているのではなく、ナジャとの関わりを通して語り手の地位を変えていることから明らかだろう。つまり物語の当初の「私」と物語の最後の「私」とは違うということである。この変化のためにこそブルトンは『ナジャ』を語らなければならなかったわけであり、語りというのが単にあった出来事を報告するのではなく、一つの行為であるとしたジュネットの考えが理解されるのである。この意味において『ナジャ』とは、ブルトンにとって目的論的な物語と言えらるだろう。

第四章 『ナジャ』の聴き手は誰か

ブルトンは『ナジャ』の「序言」においてどのような書き方を採用したかに触れ、「このような記述の故意の欠落は恐らく消失点を通常の限界を越えて押しやることで支持の更新に貢献しただろう。」(PI p.646)と書き、読者の存在を想定していることがわかる。このことから、ブルトン＝作者、我々＝読者という他の本と同様通常の関係が成立するわけだ。そして本体に入り「私は誰か。」(PI p.647)という問いかけをするとともに、ナジャの物語の始まる前段階の最後で「しかし私は早めるのだ、というのもそれは恐らく何よりもまずここであり、これ以上ぐずぐずせずに、その当時それが私に理解させたことそしてそれを正当化すること、ナジャの登場である。」(PI pp.681-682)と書くことによって、ブルトン＝語り手、我々＝聴き手という関係も成立することになる。ところがナジャの物語が始まると、この語り手と聴き手の関係は変化するのであって、物語の始まった時点においては通常の語り手と聴き手の関係が成立しているように思われるのだが、この物語の最後にブルトンがナジャに語りかけることから、ナ

ジャが聴き手であったことが判明する。つまりナジャの物語において我々は読者であって、聴き手は我々ではなくナジャであったということだ。ところがこの物語の最後において、ブルトンはナジャに対して呼びかけるのであるが、この時の人称代名詞がvousであるのだ。この物語の初め、つまり10月4日の段階で自己同一性を求めるブルトンらしく、ナジャにこのように問いかけるのである。「まさに帰ろうとしていた時、私は他の全てを要約する一つの問い、投げかけるのは私しかいず、恐らく、しかし、少なくとも一度は、要求しているものに見合った答えを見出した、一つの問いを彼女に提起したい、《あなたは誰か》。」(PI p.688)

とりあえず「あなた」と訳しておいたが、原文では《Qui êtes-vous?》(PI p.688)である。確かに初めて会ったわけであるし、親しく話をしたということではあっても、まだ距離があるということでvousが使われたのだらうと推測される。これは間違っていないと思う。ところが翌日の10月5日家に帰ろうとするブルトンがタクシーに乗ろうとすると、一緒に付いて来たナジャは、それまでの距離を置いた話し方ではなく、親しげに話しかけてくるのである。その箇所がこれである。「私は自宅に帰ろうとすると、ナジャはタクシーまで一緒に来る。我々はしばらくの間黙っていて、次に彼女が突然に私にtuを使って話す。」(PI p.690)

実際その後の会話は二人称としてtuを使って話すことになるし、それはこの場面だけではなく、その後も続くことになるのだ。ところが物語の最後に再びブルトンはナジャをtuではなくvousを使って呼びかけるのである。確かに毎日のように会っていた後の記述で、「私は、かなりずっと前から、ナジャと理解し合うのをやめていた。実を言うと、恐らく我々は今まで一度も理解し合ったことなどなかった、少なくとも生活の単純な物事を検討する方法については。」(PI p.735)と書くわけであるから、実際はそれ程親しくなかったということかもしれない。それにしてもtuで話していたのが、急にvousに変わるのかという疑問が残る。しかしそれと同時に考えられるのが、ナジャといっても一つの固定したイメージで捉えられる存在ではなく、実際ブルトンがナジャについて「本当のナジャは誰か」(PI p.716)という問いを發したように、いくつかのイメージで捉えられる存在であるのだ。つまりいかにもシュルレアリスム精神の具現化であるような靈感を持った女性であるとともに、街の女として生きるいささか品性に欠けるところのある女性というのが、ブルトンの提示したナジャのイメージなのである。そのためナジャと呼びかけながらも、そこに存在するナジャはイメージとして複数存在したことから、vousを「君たち」として捉え複数の存在であることを暗に示唆したとも考えられるのだ。いずれにせよ、呼びかけられているのはナジャなのであるから、聴き手はナジャであるとして語り手聴き手の関係は成立するかとするとそうではなく、ナジャの物語の後の箇所でブルトンはまさに「君」に対して語りかけるのである。この「君」なる女性は、『ナジャ』の原稿を執筆し最終段階に入った時点で知り合い、一時的にブルトンの愛人となっていたシュザンヌ・ミュザールである。ブルトンはこのシュザンヌ・ミュザールに『ナジャ』の原稿を見せていたことが明らかになっている。信頼を寄せていたとも言えるし、『ナジャ』の原稿を提示することで自分というものを知って欲しいと希望したのかもしれない。いずれにせよテキストにおいて「君」と呼びかけているのであるから、ミシェル・ビュトールの『心変わり』にあるように、まさに聴き手として存在する。ナジャの物語の聴き手がナジャであるとするなら、「君」が聴き手となっ

ているこの部分は、ナジャの物語に対してメタ物語的な位置にいるということになる。従って『ナジャ』における聴き手は、第一部では我々が、ナジャの物語である第二部ではナジャが、そして最後の第三部においては「君」と言われるシュザンヌ・ミュザールがそれであるということになる。この聴き手の問題は、例えばジュネットが『フィギュールⅢ』で述べているように、「聴き手の役割はここにおいては全く受け身であり、良くも悪くもあるメッセージを受け取り、聴き手から遠いところでそして彼なしで完成された作品を後になって《消費する》だけに限られる」(FIII p.265)ということではなく、聴き手も物語の中において何らかの役割を果たしているということなのである。確かに書簡体小説において我々は送り手に返事を出すこともできないし、物語の中に入って介入することもできないのであるが、ジュネットも言うように「物語は、全ての発言のように、必然的に誰かを対象としていて、常に空疎でも聴き手への呼びかけを含んでいるのだ。」(FIII p.266)

『ナジャ』の第一部においてブルトンによって語られる様々なシュルレアリスム的とも言うべき体験は、誰かと特定することなく数多くの人たちに知って欲しいというものであり、それは既に完成した小話群であるのだ。ところが第二部においては、本体の冒頭において「私は誰か。」(PI p.647)という問いを投げかけていて、誰と関わるかがそれを決定するという考えを示しているのであるから、ナジャが登場した以上、単なる出来事の記述にとどまらず、語りの行為がナジャと無関係であることなどあり得ない。そして最後の第三部において「君」が聴き手になっているということの意味は、ナジャの物語に何らかの手が加えられたというよりも、ナジャの物語を一冊の本として完成させるということであったのだ。つまりブルトンは「君」に対して『ナジャ』を提示したいということなのだ。このように考えるならば、ナジャの物語は『ナジャ』の中にある一つの物語であって、物語の中の物語という位置付けになるだろう。それは第一部のシュルレアリスム的体験として語られる様々な出来事と変わるところがない。ただ「私は誰か。」(PI p.647)という問いかけに対して提示された物語である以上、そして我々も聴き手として存在している以上、バルトも言うように、我々も『ナジャ』の真の作者としてテキストに立ち向かうことは可能であるのだ。

第五章 『ナジャ』においてブルトンは一人二役である

我々は書簡体小説を読んで作中人物の手紙に返事を書くことができないように、語り手と聴き手の水準は一致していなければならない。『ナジャ』の中のナジャの物語において語り手がブルトンである場合、その聴き手はナジャであり、また物語中において語られるナジャに対してはブルトンが聴き手として存在する。しかしナジャの物語の最後においてナジャはブルトンであることが明らかになるので、ブルトンはナジャに偽装して語り、かつブルトン自身の語りを聴くことになる。つまりブルトンは二人の語り手であると同時に、二重になった聴き手でもあるのだ。10月5日ブルトンとナジャが帰る時、ナジャは一つの遊びを提案するが、それは次のような台詞によって語られる、「えーっと、私はね、こんな風に私は一人にいる時自分に話しかけるし、いろんな話を自分にするの。それで下らない話だけじゃないわ。私が生きているのはまさに完全にこんなやり方なの。」(PI p.690)といったものであり、これに対してブルト

ンは「人はここにおいてシュルレアリスムの渴望の頂点、その最強の限界理念（下線原文）に触れるのではないか。」(PI p.690)と評していることも暗示的である。つまりブルトンは『ナジャ』においてまさに実践しているのである。この語り手と聴き手を兼ねるという一人二役は大変であるということから、語りをやめてしまった場合どうなるか。語りが存在しないのであるから、必然的に聴き手は消滅してしまう。『ナジャ』においてはナジャは聴き手であると同時に物語内においては語り手でもあったわけであるから、ナジャの声も聞こえてこないということになる。ナジャの物語の最後において、ブルトンが「私はあなたの言っていることが聞こえない。」(PI p.743)と言っているのは当然のことなのだ。このように聴き手を欠いてしまえば、語り続けることができない。それでもこの『ナジャ』を完成させたいと思えば、新たに聴き手を設定する他ない。それが当時ブルトンの愛人として現われたシュザンヌ・ミュザールであって、このあたりの事情を理解すれば、ナジャの物語以降の第三部においてブルトンが本の完成のために苦勞している様子がわかってくる。事実ブルトンは次のように書いているのだ。「私は羨ましい（これは一つの言い方だ）本のようなあるものを準備する時間があって、最後まで来た時、そのものの運命とか結局のところそのものがもたらす運命に興味を持つ方法を見出している全ての人が。途中少なくともそれを諦める本当の機会がその人に生じたということを私に信じさせてはくれないものか。」(PI p.744)

シュザンヌ・ミュザールが現われることによって聴き手を見出し、ブルトンは『ナジャ』のテキストの完成へと至るわけであるが、この聴き手の存在を誇示するかのよう、第三部においては「君」が頻出されるのである。もちろんこのような呼びかけの有る無しに拘らずジュネットも言うように、聴き手は必ず存在するのであるから、この呼びかけ自体はそれ程問題ではないかもしれない。むしろ指摘しておきたいのは、『ナジャ』のテキストは問いかけによって成立しているということなのである。既に指摘したように『ナジャ』は「私は誰か。」(PI p.647)という問いかけに始まり、ナジャの物語においてもナジャに対して「あなたは誰か。」(PI p.688)と問いかけているわけである。この問いかけは当然ナジャに対して向けられたものであるのだが、同じような問いかけが為される時、つまり「本当のナジャは誰か」(PI p.716)という問いかけが為され、更にテキスト上においてはこれよりも少し前の部分で「現実、私は今では知っているが、狡猾な犬のように、ナジャの足元で横になっているこの現実の前で、我々は誰だったのか。」(PI p.714)という問いかけが為される時、これは最早ナジャに向けられたものではないことは明らかである。つまりブルトンはブルトン自身にこの問いかけをしているのである。従ってこの流れから言えば、ナジャの物語の最後において、ブルトンが「誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)という問いかけをしたのは、ブルトン自身明言しているように、「私自身に」(PI p.743)だったのである。このような問いかけが、第三部においてブルトンが「君」と呼びかけるようになると消滅してしまうのも、その意味で必然的である。

そして、ここにおいて我々が指摘しなければならないのは、何故ナジャを消滅させる必要があったのかということである。例えば仮にブルトンがシュルレアリスム運動の仲間である誰かを聴き手として設定することもできたはずである。しかしその方法はとらなかった。そして実在しているナジャについての物語をナジャを聴き手として想定ながらも、結局のところナジャ

とはブルトンであったことがブルトン自身によって明らかにされてしまう。ここにあるのは物語の外への働きかけや影響を拒否する自己完結的な物語世界なのである。もちろん物語の初めからナジャがブルトンであった、ブルトンはナジャに偽装していたというのではない。当初ナジャはナジャとして存在し、ブルトンはナジャを相手にしてナジャや自分のことを話していたのである。ところが、目の前にいるナジャはいつの間にかブルトンにすり替わっていたということなのである。つまりイメージとして言うなら、ブルトンは鏡に映った自分自身に語りかけていたということである。これについては第二部で言及することになるラカンの鏡像段階理論が有効となるのだが、ここにおいてはそれには言及せず、ジュネットの物語論にとどめる形で言及しておくなら、『ナジャ』の冒頭が語り手によって「私は誰か。」(PI p.647)と問いかけられ、ナジャの物語の最後において「誰だ。私一人なのか。私自身なのか。」(PI p.743)と問い直しているわけであるから、この『ナジャ』のテキストの目的は聴き手としての「私」の獲得にあったのだ。ブルトン自身自分とは誰であるかという問いかけを友人への手紙で書き送っているように、この問題は『ナジャ』のテキストに限定されるものではなかったのだ。そして結局のところこの問いかけは誰か他の人によってその回答を得るというのではなく、自分自身によって見出さなければならない問いであったのだ。要するに自問自答ということだが、問題は語り手は一体誰に語りかけるのかということなのである。敢えて特定しない場合、それは読者が聴き手という立場を得ることになるが、ブルトンはナジャの物語の最後において「誰だ。」(PI p.743)という叫びを投げかける相手として「私自身」(PI p.743)とともに「私自身を迎えに最も遠くからやって来ている人」(PI p.743)と限定しているのである。この「私自身を迎えに最も遠くからやって来ている人」とは誰か。このテキストの少し前の部分でナジャがアンリ・ベックから忠告を受けていたという奇妙な体験に触れて、「そこには、少なくとも、しなければならないことについて聖人や何らかの崇拜の対象に尋ねること以上に無分別なことは何もないのである。」(PI p.741)と書いていることから、超越的な存在とも考えられるが、ジュネットの言うように語り手の水準と聴き手の水準が一致していなければならないことを考えると、そのような超越的存在はあたかも神に語りかけるが如くのイメージであろうが、マルクス・ガブリエルが『何故世界は存在しないのか』⁷⁾において述べているように、自らの外部に設定している神なるものは結局のところ人間の内心にあるのだということを考え併せるなら、この「私自身を迎えに最も遠くからやって来ている人」とは「私自身」に他ならないのである。ブルトンが語り手と聴き手を兼ねている物語世界は、ラカンの言う「手紙は必ず宛先に届く」という有名なテーゼを実践するものであって、物語以外の外の世界は存在せず、これこそまさにシュルレアリスムのと形容し得るものなのである。

第二部 ナジャは何故不在になるのかをラカンの読み解く

第六章 ナジャの不在という最後から物語を見ていく

『ナジャ』の第一部の最後においてブルトンはナジャの登場を予告しているわけであるし、実際1962年の改訂版において表現上の問題からいくつかの修正が加えられているとはいいなから、物語内容という大筋においては初版と同様であるということを考えるなら、ブルトンは

最初からナジャの不在を知っていたということになる。テキストにおいては歴史的現在が使用され、あたかも現場の状況を逐一報告されているような印象があるため、ブルトンがナジャと初めて出会う時点においては、ナジャの不在を知っていないかのように思えてしまうが、実際はそうではないのだ。ブルトンはナジャの不在という前提に立って物語を始めているのである。ブルトンはナジャの不在を知っていたということから、我々は逆からこの物語を見ていこうというわけである。

まず『ナジャ』の第一部の最後においてブルトンはナジャの登場を予告するのであるが、その直後、そしてこれがまさに第一部の最後になるのであるが、それは次のような詩的な描写である。「さてようやくアンゴの館の塔がそびえ立ち、鳩から落ちる、羽根の雪が全て、かつては瓦の破片が敷きつめられそして今や真の血で覆われている大きな中庭の地面に触れて溶けているのだ！」(PI p.682)

このアンゴの館というのは、ブルトンが『ナジャ』を執筆するために編集者のエマニュエル・ベルル⁸⁾に紹介してもらったいわば隠れ家的な場所であり、まさに『ナジャ』が生まれた場所ということになるのであるが、そこに舞い降りた雪は消滅し、後には血で覆われているとなれば、ナジャの消滅と象徴的な死が既に明らかとなっているのである。そしてそのナジャの物語が始まった10月4日の冒頭の記述はこうである。「去年の10月4日、全く何もすることがなく非常に気の滅入る最近のある午後の終わりに、私はそういう時をすこす秘訣を持っているので、ラファイエット通りにいた。」(PI p.683)

ここにある「秘訣」というのは、既に「新精神」において謎の女性と遭遇したという一件があるので、街中を歩いていればまたしても謎の女性に遭遇できるかもしれないということではないかと想定されるが、その後すぐにナジャに出会うことになるわけで、不思議な程喜びとか驚きといったものは感じられない。全て予定の行動であったかのようだ。そして10月5日も6日も続けてブルトンはナジャと会うのであるが、会って4日目の段階でブルトンはナジャと別れるという考えが出てくる。顔はナジャの方を向いているが、足はもう出口に向かっているという感じである。実際テキストには次のように記されている。「そして明日の晩まで待とうと決心することは不可能だ。もし私が彼女に会わないとしたら、午後どうするか。そしてもし私がもう彼女には会わなかったとしたら。私はもうわから(下線原文)ないだろう。従って私はもうわからないというのに値しただろう。そしてそれは決して戻らないだろう。」(PI p.701)

これはナジャと別れることを、結局はナジャと別れた者の視点から語られる言葉である。ナジャと別れた後、またナジャと同じような女性と出会うことは最早ないと知っているのである。またこの後の箇所でも、ナジャと会う約束もしていないのに偶然出会うことになるのであるが、「私が彼女に出会ってこれでもう二日続けてになる。彼女は私の意のままであることは明らかだ。」(PI p.702)

既に指摘したように『ナジャ』はブルトン一人から成る物語世界であるから、ナジャに会うのも別れるのもブルトンの思いのままであることは明らかだが、この裏側にあるのは会いたくなくなればナジャは現われまいということなのだ。10月8日の記述において、ブルトンは約束の場所でナジャに会うことになっていたのだが、結局会えなかったということで次の記述があ

る。「他の出来事もなく過ぎた、その日の終わり頃、私はいつもの酒場（ア・ラ・ヌヴェル・フランス）に赴くが私はそこで無駄にナジャを待つ。私はかつてない程彼女の行方不明を恐れる。」(PI p.703)

ブルトン自身は心配だと言っているが、ナジャ消滅に向かって事態は動き出していることは明らかである。10月8日に会うことができなかったのはブルトン自身の勘違いで、たまたまこの日だけ別の場所で会うことになっていたのを忘れていたためだということが10月9日にわかるのだが、この日の冒頭の記述はこうである。「ナジャは私の不在時に電話をかけてきた。電話に出た者は、彼女に私の代わりにどのようにして連絡をとるか尋ねたのだが、彼女は《私には連絡できない》と答えた。」(PI p.703)

何故会うことができないのかについては、極めて現実的な理由があるかもしれないのであるが、会いに行く対象としてのナジャの不在を予感させる。会いたいと思えばそこにいるという実在性を感じさせないのだ。そして10月10日である。ナジャはブルトンに次のように呼びかけるのである。「あんたは私について小説を書くのよ。本当よ。いやと言っては駄目。気をつけてね。全ては弱まり、全ては消えるの。私たちの中で何かが残されなければならないの…」(PI pp.707-708)。

ナジャ自身の口から語られ、自らの消滅を予告しているのである。まだブルトンとナジャは別れてはいないといいながらも、既に別れた後のことが考えられているのである。またこの時ナジャ自身の言葉として「私は鏡のない部屋の中で風呂の上の思考なの。」(PI p.708)というのがあり、ナジャは最早実在する生身の人間ではなく、ブルトンの思考により生み出された観念的なものにすぎないということがわかる。ナジャの消滅に向けて徐々に準備が整っている段階である。10月12日になると、ナジャはナジャではなく別の人格に移っていくことになる。消滅の前の段階で、ナジャとは確固たる存在ではなかったというのが暗示されてくる。「夕食後、パレ・ロワイヤルの庭園の周りで、彼女の夢は私が彼女についてまだ知らなかった神話的な性格を帯びた。彼女は一瞬、非常に奇妙な幻想を与えるに至るまで、かなり巧みに、メリュージュという人物を作り上げる。」(PI p.710, p.713)

次いでブルトンとナジャがサン・ジェルマンに行った時のことである。「その城の前を通りながら、ナジャはマダム・ド・シュヴルーズになった。」(PI p.714)

日記形式で書かれているのはこの10月12日までなのであるが、恐らくは事態の経過から10月13日に該当すると思われる箇所には、「別れが結局のところ不可能になったかどうかは、私次第でしかなかったのだ。」(PI p.718)とあり、別れに至る最終段階ということになる。ブルトンとしては別れることが既に決定している出会いにおいて、別れの徴候を少しずつ示してきたというわけである。そしてこのことは時制に如実に表われていて、ブルトンはナジャとの出会いとその以後の逢瀬について現在形を使用し、まさに眼前に存在するかのよう表現してきた。ところが10月13日以後の記述において、「私は多くの回数ナジャと会った」(PI p.718)と複合過去形で表現しているにも拘らず、「私は、かなりずっと前から、ナジャと理解し合うのをやめていた。」(PI p.735)と大過去で書くに至るのである。このことはブルトンとナジャとが逢瀬を重ねていた時点で、既に別れがいつ起こっても不思議はないという状態だったことを示し

ている。ブルトンはナジャと別れるために出会い逢瀬を重ねていたと言えるのであるが、何故そのようなまわりくどいことをしたのか。

第七章 ナジャはブルトンの鏡像である

ブルトンがナジャと出会い逢瀬を重ねるが、結局のところナジャは消滅し不在となってしまうという事態は、次のようなイメージで捉えられるだろう。つまりブルトンは今ナジャと対面している。ブルトンはナジャの姿形についても言及するし、ナジャの過去のことも含めてお互いのことを話し合う。ところが次第にナジャの言っていることはよくわからなくなるし、それよりも特徴的なことはナジャ自身が別の人であるかのように姿形を変えていくことである。実に奇妙なことであるのだが、最終的にはナジャはブルトンになってしまう。ここにおいてブルトンはあたかも鏡を見るかの如く自分自身を見つめることになる。それまでナジャのいたところに自分があるわけで、ナジャはどこへ行ったのか。これは私であって、私しかないのかとあたかも確認を求めるような事態となるというわけである。

このような無定形な対象についてラカンのように解釈するならば次のようになる。そもそも「新精神」における謎の女性のように、ブルトンの欲望の対象となる存在があって、常々ブルトンはその存在を確かめたいという必要にかられていた。そんな状況で出会ったのがナジャであって、ここにおいてブルトンが主体、ナジャが対象という関係が出来上がる。主体は対象を捉えようとし、徐々にではあるが近づいていくのだが、どうもうまく捉えることができない。対象は常に一定の距離を確保しているように見えるとも言えるし、更にその距離は開いていくかのような印象すら与える。結論を急ぐ前にここで言及しておくなら、このような状態というのはブルトンの欲望が維持されているわけで、ブルトンにしてみれば決して不本意な状態ではないのだ。むしろナジャを理解し尽くすよりも、ナジャがブルトンに対して依存的であることの方が重要なのである。ここにおいて、ナジャなる存在はラカンの言う対象aであって、あたかもそれが目的であるかのように思われるが、むしろ対象aを求め続けるという幻想こそが欲望を作り上げると言えるだろう。それではブルトンはナジャに対して何を見たのか。ナジャ自身テキスト中において「私はさ迷える魂です。」(PI p.688)とか「私は鏡のない部屋の中で風呂の上の思考なの。」(PI p.708)と自らを表現したり、ブルトンが書いた『溶ける魚』の中にある戯曲的なテキストの登場人物の一人に言及して、「《エレヌ、それは私よ》と、ナジャは言っていた。」(PI p.693)という記述も見られる。そして既に指摘したようにナジャはメリュージュやマダム・ド・シュヴルーズになってみせるわけで、ナジャとはどのような存在か見ただけではよくわからないということになる。

ところがこれは逆説的であって、このよくわからないナジャの姿こそが対象aを表わしているのである。そしてこの対象aを成立させているものこそが、ブルトンの欲望ということなのである。これはマルクスの剰余価値の概念を持ち出してくればわかりやすいだろう。つまりもともとは価値のない紙幣を使って価値のある物を買うとか投資をすることによって更に価値を生み出していくということになっていて、それを可能にするのが我々の欲望ということなのである。ただ問題は価値のない紙幣といっても、我々の約束事としてその紙幣が本物でなければ

ならないということである。従って、ブルトンにとっていくらかでも姿を変えていくナジャだからといって、誰でもいいというわけではない。もちろん紙幣のように多くの人たちの承認を必要とするわけではなく、つまり他の人たちにナジャの魅力なり価値なりが承認されていなければならないということはないのであるが、ブルトンによっては認められていなければならないのである。

そのブルトンの欲望それ自体については明確にすることはできないにしても、ブルトンがそれと認めた時、ブルトンは「再認」という言葉を使うのである。これは第一部のシュルレアリスムの体験を綴った箇所、ランボーの呪文について述べているのであるが、その注において次のように書かれているのである。「それ以下ではなく、呪文という言葉は文字通りに取られなければならない。私にとって外的世界は絶えず、まさによりうまく、ランボーの上に暗号解読用グリル（下線原文）を作っていた彼の世界と折り合いをつけていた。ナントであったある街のはずれの私の日々の道のりには、他の所で、彼の道のりとともに、衝撃的な一致が創設されていた。別荘の角、庭の突出部を、私は彼の眼によって、ちょっと前には見たところかなり生き生きとした女性たちが突然彼の足跡に滑り落ちてきたように、それらを《再認していた》。」(PI p.676)

そしてこの再認はナジャの眼を通しても行なわれるのであって、それはブルトンの家にあるオブジェに対してである。「数日後に、実際、私の家にやって来た時、ナジャはギニアの大きな仮面のそれであるとしてこれらの角を再認(下線原文)した(中略)。同じ機会に彼女はブラックの絵（『ギターを弾く人』）の中に私を常に気にさせていた人物の外にある釘と弦、そしてキリコの三角形の絵（『不安をかきたてる旅』あるいは『運命の謎』）の中に有名な火の手を再認した。」(PI p.727)

この再認について語られる箇所のすぐ後で、ナジャはメリュジーヌに変身するのであって、これは要するによく見れば本当の姿が見えるのであるが、表面的に見ていると様々な姿が見えてよくわからないということになる。ところがこれは逆説を含んでいて、結局よくわからない様々な姿の中に実はブルトンが見たいと思っていたものが見えてくるということである。従ってナジャがメリュジーヌやマダム・ド・シュヴルーズに変身したのではなく、ブルトンの欲望に基づいて、ブルトンは変身したナジャを見ているということなのである。ここまで来ると、ナジャがブルトンに変身するのはあと一歩である。何故このようなことが起こるのか。サルトルの対他存在の考えによれば、恥ずかしいと思うような時、主体は分裂し、他者にとって見られる対象となる。ここにおいて主体は自らの意志に関係なく、他者の思うがままに自由を奪われた存在となる。ここにある他者の視線がナジャの変身を理解する助けとなるだろう。『ナジャ』の「序言」において、ブルトンは精神科医的な観察の視線でもって事実を捉えていることを明言する。ところがここに欠けているのは、対象となっているナジャの視線であって、これが重要な要素であることは、テキスト中においてナジャの眼だけが写真として付されているということから理解できる(PI p.715)。つまりラカンによれば、主体は対象を見ているのであるが、その時その対象は必ず主体の方を見つめているということなのである。ブルトンがナジャの本質を見極めようとする、ナジャを通過して更に先へと行ってしまうことになり、結局のとこ

ろ肝心なものを見失ってしまうのだ。ここにおいて重要なのは、ナジャの視線の行き着く先を確認することであり、それは他ならぬブルトン自身なのである。ブルトンの欲望に従って、ナジャはいくつかの変身を可能にしていたわけであるから、今度はブルトンへと変身することになる。そしてこのことは至極当然なことであって、「私は誰か。」(PI p.647) という問いを立てたブルトンにとって、知りたいのは自分のことであって、ナジャのことではないのである。ナジャについて知るということは、自分を知るための手段にすぎないのである。ここにおいて「私とは私である」という同語反復的な図式が出来上がるのであるが、これではよくわからないのでナジャという媒介項を加えることによって、ブルトンはナジャを対象としかつナジャはブルトンを対象とするという表裏の構造となるのだ。これをイメージとして逆転して捉えるなら、ブルトンは鏡で自分自身を見ていたところそこにはブルトンではない別の人物が見えてきて、結局のところそれはナジャであったというものである。つまり、ナジャはブルトンにとっての鏡像であったということがイメージとして捉えられるわけであるが、それでは何故ブルトンにとってナジャが鏡像として捉えられることになったのであろうか。

第八章 ナジャとはブルトンが作り上げた存在である

『ナジャ』における10月6日の記述の中には、「新精神」においてブルトンたち三人が謎の女性にそれぞれが別のところで遭遇した出来事が語られ、ナジャ自身それに関心を持っていることがわかる。この女性はブルトンにとって興味の対象となっていることから、単なる姿形だけではなく、何かが存在したということになるのだろう。そしてそれはブルトンだけではなく、ルイ・アラゴンやアンドレ・ドランも同様に興味を示していることから、男性一般を引き付けるものがあつたという言い方もできるだろう。それに反してナジャに対する関心は、少なくともテキスト上においてはブルトンだけのものである。この点だけを捉えるとブルトンがナジャに対して興味を示しているとか、更にテキストが進むとナジャがブルトンに対して興味を示しているということになり、その興味や関心は相互的なものとなる。ところがここにおいて指摘しておかなければならないのは、ナジャと親しくしているブルトンは、ブルトン自身ではなく自分たち二人がどのように見られているかについて意識的であったかということである。実際テキスト中においては、ブルトン自身が「私は誰か」と問いかけたり、ブルトンとナジャが互いに「あなたは誰か」という問いを投げかけているのであるが、それとは別に「現実、私は今では知っているが、狡猾な犬のように、ナジャの足元で横になっているこの現実の前で、我々は誰だったのか。」(PI p.714) という記述があるのだ。つまりブルトンがナジャに関心があるとか、ナジャがその逆であるとかということとは別に、自分たちがどのように映っているのかという他者の視線がブルトンによって提示されているということである。ここにおいて他の人がどう思おうが関係なしにブルトンはナジャを認めるというのではなく、他の人たちがナジャを認めているブルトンをどう思っているかについて意識的なのである。これは『ナジャ』の冒頭において持ち出されている諺である、「君が誰とつきあっているかを言えば、君が誰であるかを当てよう」を拡大解釈したもので、君たちがつきあっているのなら君たちが誰であるかを当てようということになる。

つまりここからブルトンがナジャに何を求め認めているかについては自覚的であり、そしてそのことが他者の承認を得ることについても自覚的であるということがわかる。この場合他者といっても日常生活における具体的な他人を意味するわけではなく、象徴的次元における大他者である。この象徴的空間は、この場合ブルトンということになるが、ブルトンを判断する基準を構成していて、具体的に言うならシュルレアリスムである。つまりブルトンはシュルレアリスムのために活動していて、それは私的空間と公的空間を区別して成立しているのではなく、ブルトンの全てについて当てはまるものなのである。ブルトンとナジャが出会い逢瀬を重ねている時、それはあたかも二人だけの私的な空間を形成しているようでありながら、ラカンの言う大文字の他者が存在するのである。大文字の他者から見てブルトンがナジャを選んだことについて認められるかどうかということなのだが、シュルレアリスム自体ブルトンの作り上げたものと言っても過言ではないのであるから⁹⁾、認められるということについては既に諒解しているのである。ただ大文字の他者といえども現実世界において存在する生身の他者というわけではなく、あくまで本人の仮想的存在である。大文字の他者＝神というわけではないが、何か倫理的な判断をする時に強く作用することができれば神は確かに存在するということになるが、意識されなくなると存在しないが如くになってしまう。このように本人が大文字の他者を意識すればする程存在が確かなものになるというわけである。ナジャの一人遊びに対して、ブルトンが次のように評価する時、つまり「人はここにおいてシュルレアリスムの渴望の頂点、その最強の限界理念（下線原文）に触れるのではないか。」(PI p.690)と書く時、実質的にこの判断をしているのはブルトンなのであるが、ここにおいて指摘されている「人」(on)とは大文字の他者なのである。仮にこの考えに同意するかどうかでもって象徴的基準に服するかどうかが決まるわけで、これは倫理的という他の人からどう思われるかというくらいで実体的なものは存在しないのと同様に、我々の内心を左右することになるのだ。もっともこの大文字の他者は現実の生活に入り込んでいる共同幻想とは違って、実際の生活においてはしないかのよう機能することが多い。例えば暗黙のルールというものがあり、それは単なる見かけにすぎないようではありながらも、それに反した場合のことを考えれば守らざるを得ないということになる。ところがこの大文字の他者とは、少なくともシュルレアリスムということに関しては脆弱なものと言えよう。つまりシュルレアリスムに合致しようとしていようと、一般の人たちには関係ないということである。以上のことから、ナジャがどのような存在で、そのナジャを評価するブルトンはどのような存在であるか、大文字の他者からどのように映っているかについては、ブルトンの主体的な判断が基準になると考えて間違いない。

ここに至って我々は、ラカンの有名なテーゼである「女性は存在しない」を持ち出してくることができる。一般的な考えとしては、まず初めに女性がいて女性的な魅力を示すことによって、男性の欲望がかきたたえられるということになるのであるが、ラカンは逆である。女性的なものを作り上げているのは男性の欲望であって、仮に男性が欲望を抱かないということになれば、女性も消滅してしまうというものである。このテーゼを『ナジャ』において適用すれば、「ナジャは存在しない」という既に指摘した結果と合致することとなる。それでは何故ナジャは存在したのか。それはブルトンの欲望がそのように作用したからである。実際ナジャにはブ

ルトンを引き付ける要因があったのであろうが、ルトンの欲望に自覚的になることでナジャはルトンの意図する存在に変化していったということは言える。ルトンはナジャの話の飛躍や独り言について理解できないという反応を示しているが、そもそもこのような事態も、ナジャがルトンの意図を察知して意図的に自分自身を演出したものか、あるいは精神錯乱に至る要素が潜在的にあったのが顕在化してきたのか、その判断はできないが、少なくともそのような傾向も含めて、ルトンの意図したナジャ像に合致していたと思われる。ところが街の女としての存在が、ルトンの欲望を減少せしめたことは明らかなようである。あるいはそれは表向きの口実であって、別の要因があるのかもしれないが、少なくともルトンの欲望がなくなることによって、ナジャの存在根拠は失われるのである。ルトンがナジャについて大過去で表現するようになった時点で、最早現在とは何の繋がりもない存在ということであり、欲望が既になくなっていくことは明らかであり、ナジャの消滅は必然的だったのだ。ナジャという女性がいて、たまたまルトンと出会うことによってナジャという存在が明るみに出たということではなくて、仮にナジャがルトンに出会っていなければ、テキストに書かれたような女性ではなかったということになるだろう。ラカン的には欲望がなくなることは避けるべき事態であって、欲望を維持するように努めるのが必要なのであるが、ルトンにとってナジャとの出会いは「これらの偽りのお告げ」(PI p.701)であり「これらのある一日の恩寵」(PI p.701)で「魂の危険な場所、深淵」(PI p.701)であるとするならば、ナジャとはラカンの言う現実界で、何かわけのわからないものが蠢いている、あまり直視したくない存在と言えるだろう。

第九章 父の名の不在がもたらすもの

あまり関わりたくない現実界に対して距離を置きたいと思えば、鏡像によって自分自身を認識できるという段階を経ているのであるから、象徴的世界に逃げ込むことである。目の前にある紙幣をただの紙切れにすぎないと本当のことを言って拒否してしまうのではなく、この紙切れは社会を構成する人たちの相互の信頼関係に基づいて価値あるものとされているという、象徴的ネットワークの中に身を置くことが必要なのである。もちろんこれは現実界、想像界を経た上で成り立つのであって、例えば「裸の王様」という童話において、子供が王様は裸であると指摘するのも当然のことなのである。大人たちは同じように王様は裸であると認識しているが、一旦それを括弧に入れる形にして、王様の着ている服は素晴らしいという認識に同意するのである。もちろんそれでも王様は裸であると指摘することは可能であって、実際王様の服は素晴らしいとすることは虚偽であり、それを認めること自体自己欺瞞である。

このいずれの立場をとるかに関わらず、必要なのは現実界、想像界という段階を経ていることなのである。その上での象徴的世界なのであるが、この世界を支配する父親的存在というものを『ナジャ』のテキストの中に見出すことができるかということ、そうではないのである。文字通りのルトンにとっての生身の父親はもちろんのこと、ラカンの意味での父親も存在しないのである。実際シュルレアリスムは現実世界の拒否を掲げているわけであるから、父親的存在の否定は最早前提と言うしかない。そのためか、『ナジャ』はそれを既に通過してしまったかのような感がある。ルトンにしてみれば、むしろ現実界の方を覗くことこそが重要と考

えているように思われる。ところが象徴的次元にいれば、確かに虚偽の生活を送ることになるかもしれないのであるが、ある意味安泰だということにはなるだろう。そして現実界の方に向かうということになれば、単に手探りで進んでいくというわけではなく、何らかの指針なり方向付けが必要になってくるはずである。何故ならブルトンは『ナジャ』において無意識への依存を表明する際、次のように書いているからである。「私はもう一度無意識だけを再認したい、私はそれだけしか当てにしたいし、私の眼の中にあることを私が知っていて夜に包みにぶつかることを私に免除してくれる光り輝く点を私自身じっと見つめながら、ほとんど心ゆくまでその広大な防波堤を見て回りたいのだ。」(PI p.749)

この「光り輝く点」というのが目標であるのか道案内をしてくれるものなのか確かではないが、むやみやたらと歩き回るものではないのだ。何故なら現実界とは攻撃性に満ちた暴力的なものであるからで、それを認識しておく必要があるのだ。これと象徴的世界との関係を明らかにするために、ラカンも引用しているカフカの『審判』の中にある「掟の門」を例に取ろう。表面上明らかになっているのは、男はまず好きで行ったのではなく、呼び出されたということで、ここに命令があるということが認められる。ところが行った先には門があって、この門番から入れないと言われる。これは禁止であり命令でもある。呼ばれたから来たという事情があるし、門番も今は駄目だが、いずれ入れるようになるだろうということを言う。これは許可ということである。ここにあるのは象徴的世界のルールであり、それに従わなければならないということになっている。仮に象徴的世界だけしか知らず、それを額面通りに受け取ると、男は門のところまで待たざるを得ない。そして実際男はそうするのである。仮にしばらく待って、男が門の中に入ることができて、目的を果たすことができたというのなら、確かに呼ばれて行っているのに門の中に入れないというのも少しおかしな話だとは思いつつも、現実はその思い通りに行かないという経験則から事態を受け入れることになるだろう。ところが実際は男は門の中に入れないうまま死んでしまうわけで、この時門番はこの門はお前のためだけにあったのだと言ってそのまま帰ってしまうのである。象徴的世界を、それも表面的なものだけをそのまま受け止めているからこういう事態になるのであって、「王様は裸だ」と叫ばなくても、心の中でつぶやく必要があったのだ。つまりここにおいて必要となってくるのは、現実界とは攻撃的で暴力的であるという本質をまず理解しておくことであって、その経験を経て象徴的世界に向かうことなのである。現実界がどのようなものであるかを知っていれば、確かに門があって門番もいて、とりあえずはもしくは永遠に中に入ることはできないという事実を認識しながらも、その背後に何があるかについて目を向けることができるのである。ラカン派なら、そこに秘密があると思っていたが、実は何もなかったのだという解釈を示すのであるが、何もないというよりは、攻撃的暴力的な悪意のようなものがあると言うべきだろう。つまりそういうものがなければ、門を作ることも門番を立てることも必要なかったのである。敢えて言えば、男の自由を奪う、主体性を奪うということが目的だったのである。そして次に問題になるのが、門を作らせ門番を立て、門番に男を門の中に入れないように命じたのは誰かということである。もちろんここにおいてそれを特定することはできないのであるが、少なくとも言えるのは、この奇妙で非人道的な門を作らせ維持させるものが象徴的世界の中には存在するということであ

り、それは大文字の他者のように現実的には機能するが、実際に生身の存在としてあるわけではないのと異なっている。このような掟の門にどのように対応すればいいかという、象徴的に示されている言葉をそのまま受け取らず、その背後にあるものを理解して、ただちにその場から立ち去るべきである。

それでは『ナジャ』の中に掟の門と同様の存在を見出せるかということ、それはない。初めからそういうものはないということを前提にして、ナジャの物語は始まるのだ。ただ事後的に、つまりブルトンの欲望も消え失せ、ナジャが成立しなくなり、あくまでただの街の女としての存在しか認められなくなった時点で、現実の世界の中で再構成されるのである。この時点でナジャは精神錯乱して入院させられた女性としての扱いを受けるため、ブルトンはそれに対抗する形で精神医学界の問題を指摘することになるのであるが、それはあくまで事後的なのである。例えば精神的に問題のある女性がいて、その女性を助けるために現状の問題点と戦うということなら、物語において父親的存在が支配的になっているということは言える。しかし実際のテキストはそうではないのである。このような状況においては、何でも出来るように思われるが、サルトルの言う自由と同様に、何をどうしていいかわからないということになってしまう。先に指摘した掟の門の例で言うなら、仮に男が門の背後にあるものもしくは何もないということを理解し、その場を立ち去ったとして、その後どうするかという問題がある。近代社会においては、様々な選択肢が用意されているということになるだろうが、最早行くところがないとなれば、死ぬまで門の前で待つ、つまり門を設定した者の悪意ある意図を理解し、承知した上で門のところに戻って来ざるを得ないということにもなる。つまりここには象徴的世界がもたらす秩序に距離を置くことの危険性があるということだ。しかしこの象徴的秩序は拒否したいということになれば、この時点で自分の存在の根拠を失うという事態にも至るわけであるが、それを回避するためにも再びナジャに依存するという対応をとることになる。女性は父-の-名の一つであるとするラカンのテーゼが当てはまるのだ。

第十章 母親的超自我を担うナジャ

一時的にせよブルトンにとって愛情の対象であったナジャが、最終的にはブルトンへと置き換わってしまうという現象はまさに同一化であって、我々にロバート・ブロックがエド・ゲインの犯罪にヒントを得て執筆した小説が原作のヒッチコックの『サイコ』を連想させる。物語としては全く別のものであるが、同一化について見ておくべきところがあるので、まずは共通しているところを探っていこう。『サイコ』においてマリオンという若い女性は勤め先の会社で雇い主から渡された四万ドルを銀行に預けることなく横領し、車に乗って逃げてしまう。途中あるモーテルに着き、そこで泊まることになるのであるが、そのモーテルの若き経営者がアンソニー・パーキンス演ずるノーマン・ベイツである。ノーマンは恐らくはマリオンに興味を持つのであるが、それに対してノーマンの母親は激しく反発する。ここにおいてノーマンとその母親の二人の存在が提示される。我々はノーマンに母親がいて、かなり口やかましい存在であるとわかるのだ。ところがマリオンがシャワー室で殺され、事件が起こったのかもしれないということで身内から雇われた探偵がやって来る。この時点において殺人は明るみには出てい

ず、あくまでマリオンの失踪が理由である。この探偵の存在に危機を感じたノーマンは、部屋にいた母親を地下室に連れて行こうとする。ここにおいてノーマンと母親ははっきりと映像に映っているし¹⁰⁾、地下室に連れて行かれるのを拒否する母親の声も聞こえる。この時点においても我々はノーマンと母親の二人の存在を認めている。ところが最終的に事件が解決されると、ノーマンはノーマン自身であるとともにノーマンの母親でもあったことが明らかになる。事実ノーマンの母親は11年前に死んでいたのだ。我々が母親として捉えていたのは、母親のミイラだったわけだ。精神分析的に言えば、ノーマンは母親の超自我に常に支配されているのである。

『ナジャ』において父親の存在は不在であるということは既に指摘したところだが、この空白を埋めるのは何かというのが問題になる。ブルトンにとっては、「新精神」において登場した謎の女性がまだブルトンの心を支配している。その時の謎の女性は結局は見つからなかったのだが、ここにおいてナジャが登場することによって、この空白を埋めることが可能になり始める。ナジャがどういう女性であるか全くわからないわけであるから、謎の女性としての資格は十分である。謎は解明されるために存在するわけであるから、ブルトンとナジャとが一見仲のいい関係になるのも自然であり必然的である。ブルトンにとっては独占的で支配的な母親は登場しないのであるから、ナジャこそが母親の役を引き受けることになる。ナジャは10月4日と5日の段階ではそうでもないのだが、6日の段階になって、ブルトンが「新精神」において既に触れた謎の女性の件について事実説明を加えないことに不満を表わすし、「彼女は私に、このやり方で、彼女の意に反して何も企てないように懇願する。」(PI p.693)

そして10月10日の段階において、ナジャはブルトンに自分たちのことを小説に書くようにと言うのである。ノーマンにとっては父親の不在を母親が埋めるということになったが、母親が死んでからもその代わりの存在を見つけることができないために、ノーマンの精神においては母親は生き続けるのである。父親の不在は女性との関わりを自由なものにするが、父親の存在の代わりをしている母親はそれを認めない。ノーマンが母親としてマリオンをシャワー室で殺すのはそのためである。一方ナジャは、ブルトンに対してそれ程独占的でも支配的でもない。そもそもナジャ自体がブルトンによって操作されているかの如くなのである。例えば10月6日の記述には次のような箇所がある。「彼女は私に彼女に対する私の力、私が望み、恐らくは私が望んでいると思っている以上のものを私が彼女に考えそしてさせる私の持っている能力について今話している。」(PI p.693)

ここにおいて支配的なのはナジャではなくて、ブルトンなのだ。それでは何故ブルトンはナジャを必要とするのだろうか。端的に言えば空白を埋めるためであり、何か問いかけをした時それを返してくれる存在が必要なためである¹¹⁾。しかしラカンのように説明すれば次のようになるだろう。ラカンのテーゼによれば、「現実の場は対象aが抜き取られることによってのみ存在を与えられるのだが、この現実に枠組みを与えているのは対象aである。」¹²⁾

これを『ナジャ』に適用すれば、ブルトンは対象aを抜き取られることによって主体として存在しているのであるが、この対象aこそナジャであるというわけだ。従ってナジャこそが、現実においてブルトンの主体性を確立することができるのである。ドーナツの例で言うなら、ドーナツの穴はそれ自体としては空白であり、何も存在していないが、この穴が存在すること

によってドーナツという存在が可能になり、ドーナツという例の形に枠組みを与えることができるのである。穴がなければドーナツにならないが、ドーナツがなければ穴も存在しないという相互依存的な等価性が指摘できるのである。ここまで必要であるにも拘らず、ナジャは何故消滅することになるのか。それを探るために、『サイコ』に戻って考えてみよう。『サイコ』にとっても『ナジャ』にとっても共通するのは、最終的な物語の逆転である。つまり『サイコ』において母親は結局存在しなかったということ、『ナジャ』においてナジャが最後には消滅してしまうということである。我々にとっては意外な結末である。しかしそれが納得し得るものになるのは、同一化という現象が起こるからである。『サイコ』において超自我的にノーマンを支配していた母親は、死ぬことによって不在となるのであるが、ノーマンの心の中には生き続ける。それもノーマンを依然として支配するような形で、ノーマンにすれば母親をミイラとして存在させているわけであるから、生きてはいないが存在しているという認識を持つことができる。ただ生身の存在としてあるのはノーマンだけなのだが、そのノーマンに入り込む形で母親は生き続けるということで、我々から見ればノーマンの身体の中にノーマンと母親が存在しているということになる。

そして『ナジャ』において、ブルトン自らの中にナジャを取り入れてしまっている。身体的には不在ではないが、ナジャは社会から疎外される形になっている。ここにおいて問題になるのが、ノーマンの中にいる母親とか、ブルトンの中にいるナジャが、それぞれどれだけ支配的になっているかということである。『サイコ』においてはノーマンは生身の人間としてはノーマンでありながら、精神的には完全に母親に支配され、服装もしぐさも母親に同化してしまっている。ここまでくれば精神病的であるということになる。ところが『ナジャ』において、ナジャの物語の最後でナジャの消滅を明らかにした上で、『ナジャ』のテキストの第三部の冒頭においてブルトンはブルトン自身の写真を出すことになるのだ (PI p.745)。これは『ナジャ』の作者であることを示すものではなく、ナジャと同化したブルトンを意味しているのである。ここにおいてナジャはどのような存在であるのか。ブルトンはこの後の箇所、「君」と呼びかけられている女性がナジャの存在をも覆い隠してしまったことを明らかにしている。この「君」なる女性によって謎の存在自体もなくなってしまったかのようなようである。少なくとも第三部において、ナジャは完全に過去の女性であり、ほとんど忘れ去られてしまった存在となっている。それではナジャは、ナジャ消滅後ブルトンの中でどのような形で生き続けて、どのように作用しているのだろうか。

第十一章 超自我の声、ナジャの声

ミシェル・シオンは『映画にとって声とは何か』¹³⁾において、『サイコ』における母親の声について分析している。シオンによれば我々がノーマンの母親らしき姿を見るのは二回ある。もちろんそれは母親であると言い切ることは映像的にもできないし、結末からさかのぼって考えてみれば母親ではなかったということになるのであるが、それでも映画を見ている我々からすれば母親だったのだろうと認識するわけである。一度目はマリオンがシャワー室で殺される時で、まさにナイフを持った誰かである。ノーマンであるわけがないし、ひょっとしたらとい

うことで母親となるわけで、明確に見て取ったというわけではない。二度目は探偵の捜査が入るために、とりあえず隠しておこうということで、ノーマンが母親を抱きかかえて階段を降りる時である。これも明確に見ることができたというわけではない。ところが声はそうではないのだ。もちろん母親は既に死んでいて存在していないのであるから、本来ならあり得ない話であるが、映画的にははっきりと聞き取れる。これはノーマンの一人二役的な形で、声を変えてしゃべっているのだと解するのが妥当であろう。というのも、ノーマンの内なる声を映画的に実際に聞こえる形で表現してみせたのではないことは、ノーマンに声をかけられたマリオンが屋敷でノーマンと母親が言い争っているのを聞くからであって、マリオンはノーマンの内なる声を聞く立場にないのだ。この声の主が誰で、物理的にどのように発せられているかについては問わないことにしよう。その上で、映画の中で聞こえてくる母親の声は三回出てくる。一番目はノーマンがお客としてやって来たマリオンに興味を示し仲良くなろうとするのであるが、その後屋敷に行くと、そのことを巡ってノーマンと母親が口論を始める時である。口うるさくノーマンに対して威圧的ということがわかる。ノーマンは弁解しつつ結局言い負かされているのは、ノーマンがマリオンに謝罪することでわかる。二番目はノーマンが母親を地下室に連れて行こうとする時で、いくら口うるさい母親といえども力で身体を持って行かれては対応できないということで、母親の声は抵抗しているが威圧的ではない。そして最後は、ノーマンと母親とが一体化して、母親になり切ったノーマンが語る場所である。映像的にそれが母親の姿をしたノーマンであることは容易にわかるので、それが母親であると間違えることはないが、声は母親である。そして実際の母親はミイラ化されていて、マリオンの妹ライラによって発見される。ただ奇妙であるのは、最後の場面で母親の変装をしたノーマンが母親の声で語る時に、ノーマンは口を閉ざしたままであるということだ。これは恐らくノーマンの中に入り込んだ母親の声として捉えられるべきものなのだろうが、ノーマンの口から発せられたとしか考えようがない。確かに『サイコ』において母親は存在せず、敢えて存在するとすればミイラ化された母親しかいないのであるから、母親がその力をノーマンに対して発揮するのはあくまで声を通してである。ノーマンは声を通して母親と同一化するのである。

この声という観点から『ナジャ』を読み直すとどうなるか。我々は従来『ナジャ』を視線にとらわれた物語であると理解していて、それはナジャの物語の始まりである10月4日の出会いからして、ナジャについての視覚的効果に言及しているからである。またナジャの眼や、イメージの再認など視線に関するものが数多く出てくるのである。しかし声という観点から考えてみるならば、ナジャの物語の最後が、「私はあなたの言っていることが聞こえない。」(PI p.743)となっていることに注目しなければならない。つまり今まで聞こえていたものが聞こえなくなったということなのである。もちろんブルトン自身の聴覚的な問題ではない。それではそれまで何が聞こえていたのかである。時間的に逆に見ていくなら、ブルトンがナジャとあまり会わないようになった段階で、半ば思い出の中にいるナジャを捉えての次のような記述がある。「私は、日々の流れで、私の前で発音されたか彼女によって私の眼前で一気にかかれたいくつかの言葉、私が彼女の声の調子を最もよく思い出しその響きが私の中でかくも大きく残っている言葉しか、最早思い出したくはないのだ。」(PI p.719)

そして第三部において、ナジャの物語を既書き終えた段階では、次のような記述が見られる。「そんなわけで使い果たされる声は今尚人間的に沸き起り得ると私には思われるし、だからこそそこに込めたいいくつかの稀な響きを捨てることはないのだ。ナジャ、ナジャという人格はかくも遠くにいるけれども…。何人かの他の人も同様である。そして不可思議、この本の最初から最後の頁まで私の信念が少しも変わることがなかった不可思議によって、もたらされ、あり得ないことではない、既に取り戻され、最早彼女のものではない一つの名前が私の耳もとで鳴り響かんことを。」(PI p.746)

声が聞こえるというのは声の主が側にいるということの意味しているわけで、ナジャの物語の最後でブルトンがナジャの声が聞こえないというのは、ナジャそのものがないことを意味しているのだ。ところがナジャと徐々に会わないようになり、更には全く会わないようになった時でも聞こえてくるということは、声の主というのがいなくても、ブルトンに語りかけてくる超自我の声があるということになる。何故超自我なのか。ナジャは存在していないにも拘らずその声は存在するのであるから、まずはどの主体にも帰すことのできない声ということになる。あたかも幻聴のようですらあるが、最終的にブルトンがナジャと同一化することにより声の出所がわかるという形になる。ただブルトン自身がその声を発しているわけではないから、超自我ということになるのである。この声はただ単に聞こえるというのではなく、ブルトンを支配するのである。その意味でブルトンの主体化を妨げる働きさえするのであるが、それまでブルトンによって語られてきたナジャの物語の最後において、一転してブルトンを支配し得る声が出現するのである。つまりブルトンの対象にすぎなかったナジャが、声の主としての身体を消滅させながら、その声が突然主体化されるのである。要するにこの声とは『ナジャ』を支え、構成しているのである。ブルトンはこの声から逃れることはできない。何か明確な意味があって、ブルトンに何らかの指針を示しているわけではない。このようなシニフィアンの断片をラカンはサントームと呼んだわけで、これは同じような綴りである症候 *le symptôme* とは違い *le sinthome* なのである。これは解釈されるべきものではなく、即座に何らかの反応をもたらす。それは一日中耳にこびりついて離れないというわけではなく、何らかの拍子に出現し、依然として我々を解放していないことを知らされるのである。我々としてすべきことは、そのサントームを何か素晴らしいものとして有難がることではなく、単なる現実界の下らぬ断片として意識することである。このことによって、自分の奥底にある現実界を明るみに出すことができる。だからこそブルトンは超自我の声によって、「私はどうにかこうにか——人が生きていけるように——生きた」(PI p.746) ということなのである。この超自我の声によって、ブルトンは現実を見失わずにやってこれたのである。ここにおいて必要になるのは、現実とはいかなるものであるかという理路整然とした思想ではない。超自我の声は、声はデリダが脱構築において問題にしているまさに眼前の存在ということで、まさに生身の存在を感じさせるということから、現実を支える働きをするのである。この超自我の声は単なる象徴的秩序を維持させるのではなく、存在の根底を支える現実界に位置しているわけであり、ブルトンにとっては「とにかく生き続けろ」という命令を発することができたのである。

終章

『ナジャ』における物語は、二つの流れに分けられる。一つめは「私は誰か。」(PI p.647)で始まり、テキスト上には記されていないが、実質的には「私は私である」という到達点に行く流れである¹⁴⁾。もちろん直接その到達点に行けるわけではなく、その間には数多くの他者が存在する。その過程でこれはいいとかこれは違うとか判断している「私」がいる。それで全てわかったというのではないにしても、自分にしてみれば全く未知の他者を鏡像として持つてくることには違和感がある。その時点でとりあえず「私は私である」と言うことができるのである。仮になりたい「私」、理想像としての「私」がいるならば、心身ともに同一化を図ればいい。『サイコ』のノーマンは最後の場面で母親に乗り取られたかのように姿形も母親になり切るが、ブルトンはそうではない。むしろブルトンはある程度主体性を確立しながらも、次に向かうべき超越的存在を目指すのである。

これが物語の二つめの流れである。つまり「私は私である」という一つの到達点まで行けたからといってそれで終わりということではなく、「私」の存在の根底には現実界があり、それに訳もわからず身を任せてしまうというのではなく、現実界を知的に捉えることによってその何たるかを知ろうということなのである。つまり運命とか神とか言う、自分の外にあって容易にはあるいは絶対掴み取ることのできないものという風に捉えられているが、実は自らの奥底にある現実界に、それを解釈する手がかりがあるということである。『ナジャ』においてブルトンは偶然にナジャに出会ったのか。出会うことをブルトンは既に知っていたのではないか。それはブルトンが10月4日の冒頭において書いている「秘訣」(PI p.683)が全てを物語っているとと言えるだろう。ブルトンはナジャに出会うことを既に知っていた、何故ならいずれ出会うことになる女性がナジャになるからである。ところがナジャについて全て知ってしまうてはいけない。ラカンの言うように、ある一つのシニフィアンの排除の上にこの現実世界が成り立っているということであり、仮にナジャについて全てを知ってしまうなら、「私はもうわから(下線原文)ないだろう。従って私はもうわからないというのに値しただろう。」(PI p.701)とブルトン自身書いているように、ナジャについて知る必要がないということはブルトン自身の欲望の消滅を意味するわけで、それは即ナジャの消滅ということになるわけである。ブルトンはテキスト上において、突然ナジャを消滅させることにより、ナジャだけでなく『ナジャ』というテキスト自体読者にとって訳のわからないものにしてしまった。ブルトンが「序言」において書いているように、「このような記述の故意の欠如は恐らく消失点を通常の限界を越えて押しやることで支持の更新に貢献しただろう。」(PI p.646)

つまりブルトンにしてみれば、「私は私である」という形でとりあえずの自己同一性を獲得したことにより、自分は安全な立場にしながら自らの欲望を発揮させるべく、新たな謎を謎のままにしておくということである。それは一つの方法であるが、その謎が現実界にあり、その本質が極めて危険なものであることを考えれば、その危険性を回避するためには何らかの手段を講じなければならないのではないか¹⁵⁾。

注

- 1) 引用文の後等で示されている略記号は以下の文献を表わしている。イタリック体は下線で、引用符 guillemet はそのまま使用した。尚、引用文は全て筆者の訳による。

(PI) André BRETON, *Œuvres complètes I*, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1988

Nadja, 1928, pp.643-753

(FIII) Gérard GENETTE, *Figures III*, collection Poétique, Seuil, 1972

- 2) テキストで語られている内容から、ラファイエット通りを下っているブルトンと、その通りをマジヤンタ通りの方向に上がっているナジャとは、今日10区にある、フランツ・リスト広場で、当時はラファイエット広場と呼ばれていた広場の大きな十字路でしか会うことはできなかったということである (PI p.1542)。

また手紙のことについては、10月4日から13日の期間には、会う場所を決めるための目的で、これはテキストにおいても記されているが、9日に速達郵便がたった一通、1926年10月22日と1927年2月半ばの間に27通の手紙が速達郵便がナジャからブルトンにあったということである (PI p.1510)。

ナジャの晩年についてであるが、テキストでも語られているように、ヴォクリューズの精神病院に入れられるのであるが、1941年1月15日の彼女の死まで、この精神病院にいることになる。彼女は多分癌におかされていたのだ。葬儀は20日の午後にとりおこなわれた。1927年3月21日、嗅覚と視覚の幻覚にとらわれて、恐怖で叫びながら、彼女は助けを呼んだということである。3月24日、ナジャは郊外にあるペレ・ヴォクリューズの病院に送られる (PI p.1513)。これがテキストで語られているものの詳細である。

- 3) ブランシュ・デルヴァルは本名をウジェニー・マリ・パスキエという。1885年に生まれ、1973年に他界している。まず年齢からいって、ブルトンとの年の差もあり、またテキストの内容からナジャではないと断言できそうだ。事の発端はこうである。1975年2月、ブリュッセル、『裸の唇』誌の第12号に出た、『ナジャの死』というマルセル・マリアンの記事は、ブリュッセルの古本屋で編集者であるマルセル・ディウが、ナジャはブランシュ・デルヴァルで、彼の妻は姪だと断言したと主張している。ナジャの死亡が1942年で、ブランシュ・デルヴァルが1973年であるので、記事はブランシュ・デルヴァルの死後に出たということになる。同じ記事は、(1972年、ガリマールの『ベルギーのシュルレアリスム・アンソロジー』の作者である) クリスチャン・ビュシーが、1966年9月15日ブランシュ・デルヴァルが彼に自分がナジャであると言ったと報じている。

これらの記事が《最も下品なベテン》でしかないことに結着をつけるために、G.L.と署名しているが、マルグリット・ボネたちがその正体を突き止めることができなかった誰か（そしてそれは確認したところによると、ジェラルド・ルグランではないということだ）は、恐らく1980年頃、『ナジャ／ブランシュ』という題名で、アンドレ・ブルトンからブランシュ・デルヴァルに宛てた4通の手紙と、『この本で大いに夢見られたブランシュ・デルヴァル夫人に／私の称賛とともに／アンドレ・ブルトン／1927年9月27日』という『シュルレアリスム宣言』の献辞と、日付はないが『ブランシュ・デルヴァル夫人に／私の全ての称賛とともに／アンドレ・ブルトン』という『ナジャ』の献辞の写真を添えて、場所も日付もない、4頁の小冊子を出版した。この書き物の正当性は疑いが無い。手紙の正当性は、その内容と日付から、疑わしくはないように思われる。最初のもは、1922年1月24日のもので、パリのバレ・ド・コングレの便箋を使っていて、ブルランシュ・デルヴァルにこの企画への協力の手続きを求めている。後のものは、1927年の9月14日、26日と10月2日のもので、『ナジャ』におけるブランシュ・デルヴァルの写真と『頭の狂った女たち』の一場面の公表に関するものである。この女優は1922年の終わりまで双面劇場の芝居に定期的に出ていた。彼女の写真はプログラムや当時の新聞に

しばしば出てくる。1927年彼女はシャルル・バレの巡業に出ていた。この1927年のいつかというのがはっきりしないが、ブルトンとナジャとは1927年の初め頃は会っていたのだし、テキストに記されているように、ナジャは精神病院に入れられるのであるから、巡業というのは辻褄が合わない。

1927年9月21日のリズ・メイエルの手紙において、ブルトンは『頭の狂った女たち』以来、彼女の足跡を見失っていたと言っていて、そして彼は彼女の肖像と劇の一場面の写真を彼女に求めたところ《気付い》たとこのような言い方でブランシュ・デルヴァルのことを話していた。《詮索好きな女だ、多分、どういう事情なのだろうか。『頭の狂った女たち』の主要な場面について彼女がどういう解釈をしているのか、幕の背後で起こっていたことについて正確に知りたいかどうか私にはわからない。彼女は私を少しばかり当惑させたのだ》。

この劇は『悪魔の蜘蛛』という題名で、1985年に映画化されていた (PI p.1536)。

- 4) このナジャの人称については後の章でまた詳しく論じることになるが、ここでは深く追求しないでおこう。
- 5) ここにおいては、ブルトンはナジャに対してvousと呼びかけていて、とりあえず「あなた」と訳しているのであるが、それまでtuで語りかけていたのに何故vousなのかということも含めて、この問題については後で論じることしよう。
- 6) 何故見えないではなく聞こえないのかということも含めて、声の問題は重要な点であって、これも後で論じることになる。
- 7) Markus GABRIEL, *Warum es die Welt nicht gibt*, Ullstein, 2013 *Pourquoi le monde n'existe pas*, traduit de l'allemand par Georges STURM avec la collaboration de Sibylle STURM, Jean-Claude Lattès, 2014

該当している部分を説明しておく、人間とは自分が何かを知っていないわけで、だからこそ探求を始めるのだという。この探求こそが人間であるということで、これはハイデガーも定式化していた。探求することができるためには、自分自身を知らないということがまずあって、それを対象化しているのであるから、その対象との間には当然距離があって、その距離こそが我々の存在なのだという。この距離の体験、それも最大限の距離の体験こそが神とか神的なものとして体験される。このため、人間の精神は、この神的なものという形態の中に、自分自身を探っているということになる。つまり、人間の精神とは、自分の外部にあるものとして探求している神的なものが、実は当の人間の精神に他ならないということを知らないでいるのだということだ。

- 8) エマニュエル・ベルルは『ナジャ』のテキストには名前すら出てこないのであるが、重要人物である。エマニュエル・ベルル (1892-1976) は、作家、ジャーナリスト、ガストン・ガリマールによって創設された『マリアヌス』という政治と文化の週刊誌の1932年から1937年までの編集者で、1920年1月6日マリ・アントワネット・ボルデス、1928年12月1日シュザンヌ・ミュザール、そして1937年から彼の死まで有名なシャンソンの作家で演奏家だったミレーユの夫だった。この二番目のシュザンヌ・ミュザールこそ、『ナジャ』において「君」として語られる、ブルトンにとっては一時的に愛人であった女性である (PI p.1506)。

さてブルトンは『ナジャ』を書くためにアンゴの館に滞在したわけであるが、このヴァランジュヴィルでの滞在は、書くことについては実り多かったのだ。しかし、このことは、更に作者の本つまり『ナジャ』とブルトンの人生を変えさせることになる思いがけない結果を知ることになる。ブルトンは、ノルマンディーの海岸で陰鬱なヴァカンスをすごしていた最初のベルル夫人に出会った。一方ベルルは、当時ブルトンは名前さえ知らなかった彼の愛人のシュザンヌ・ミュザールと山で静養していた (PI p.1506)。

この後、1927年のこの秋にベルルが、シュルレアリストたちの会合の場所であるカフェ・シラノによく通っていて、彼がそこにシュザンヌ・ミュザールを連れて来て、彼女に『ナジャ』の当時タイプ

打ちされた第一部と第二部を読ませたということである (PI p.1507)。このあたりのことは、『ナジャ』の第三部から読み取れる。

- 9) これについては、フェルディナン・アルキエの考えが参考になるだろう。アルキエの主張が見られるのは、彼の『シュルレアリスムの哲学』の次の箇所である。「従って、ブルトンに限定したのではなく、シュルレアリスム運動で、リーダーというよりも更に、知的で思慮深い良心であったアンドレ・ブルトンに特に全ての関心を払ったとしても、少しも驚かないでもらいたい。確かに、他の人たちに別の領域で彼らが値している全ての立場をここにおいて与えていないこと、そしてアンドレ・ブルトン自身が彼らに負っているものを明確にしていなかったことは残念に思っている。ただ私はシュルレアリスムがアンドレ・ブルトンだけから生まれたのではないということ、そして彼がシュルレアリスムの真実を作ったとか定義したとかではなく、むしろそれを表現しそれに忠実であると主張したことを忘れていたわけではない。しかしこの真実がその最大の輝きに達するのは彼の作品においてなのだ。

その上、シュルレアリスムの定義そのものが仮にそれをブルトンによって表現された考えの全体と区別したとしたら困難になってしまうだろう。誰が本当にシュルレアリストであったのか、誰がシュルレアリストでなかったのかを自問すれば、言葉のけんかでしかない危険がかなりある解決不能な論争になるだろうし、シュルレアリスム《それ自体》を参照しようとするのが全て、当然のことながら、不可能になるのだ。ブルトンから離れた人たちが自身が、概して、シュルレアリストであると自称することをやめているのであるから、誰にも迷惑をかけることなくブルトンの思想をシュルレアリスムの哲学の本質と規範であるとみなすことができると私には思われた。」(Ferdinand ALQUIÉ, *Philosophie du surréalisme*, Flammarion, 1977, p.8)

- 10) このあたりは、ミシェル・シオンの考えと若干異なる。最初の母親らしき人物が登場する場面において、つまりシャワー室でマリオンが刺殺される場面で、その姿形ははっきり見えないが、それが母親であると推測するという点については、ミシェル・シオンも同意見である。ところが、ノーマンが二階にある母親の寝室から出てくる場面で、形の定かではない物体をノーマンが腕に抱えているのを見て、母親だと断定はできないとするのである。そもそも顔を見ていないではないかということである。ところが、その場面で母親の声が聞こえ、ノーマンとの言い争いめいたやり取り、つまり地下室には連れて行かないでくれという母親の声とそれをなだめるノーマンの声を聞いているのであるから、ノーマンの腕にある何かを母親だと我々がみなすのは当然だと思われる。
- 11) 我々はここにおいて共依存という概念も想起し得る。
- 12) ジャック＝アラン・ミレールはこのラカンのテーゼに対して次のような注釈を加えている。対象を現実界ということで無視することによって、現実の安定が保たれていると我々は理解している。ところがそうではないのだ。対象aが現実の内部に存在しなくなれば、どのようにして対象aは現実には枠組みを与えることになるのか。現実の領域から抜き取られることによってこそ、対象aは現実には枠組みを与えることになるのだ。例えば後で例として出すドーナツの穴を考えよう。穴の部分が抜き取られることによってドーナツという枠組みが得られるのだ。穴は穴としてその枠組みが得られるが、それはドーナツの枠組みでもあるのだ。ドーナツはこの穴によって表現されるのだ。つまり対象aはどのようにして抜き取られた断片であり、この断片が抜き取られることによって現実に対して枠組みが与えられるのだ。存在の欠如としての主体はこの穴の部分に相当する。存在として見た場合、主体は抜き取られた断片でしかない。ここにおいて、主体と対象aとの等価性が指摘されるのである。尚、ミレールはドーナツの例を引き合いに出しているわけではない。(Jacques-Alain MILLER, *Montré à Prémontré*, in *Analytica* 37, 1984, pp.28-29)
- 13) Michel CHION, *Le son au cinéma*, Cahiers du Cinéma Livres, 1985
- 14) ランボーが言うように、「私は他者である」Je est un autre.というのは別の観点である。つまり「私」

はこの現実中存在しているが、「私」の身体は時として思うようにならず、他者性を発揮する。また社会における「私」はある種の役割を演じていて、またサルトルの対他存在にあるように、他者から見た「私」を押し付けられることがある。従ってそこにあるのは、「私」にとっての他者としか言い様がない。

また、ラカン的に言うと、主体間の関係というのは、鏡像段階理論によれば、想像的かつ双数的関係であり、攻撃的關係とも言える。従って、この関係においては、自我は一人の他者 (*un autre*) として構成され、他人 (*autrui*) はもう一つ別なエゴ (*alter ego*) として構成されている。ラカンにとって自我でありながら他者であるというのは、もともと自我が他者であったということから言えるのである。(Jacques LACAN, *L'agressivité en psychanalyse*, 1948, R.F.P XII, pp.367-388, *Écrits*, Seuil, 1966, pp.101-124)

- 15) ブルトンが『ナジャ』において「私は誰か」という問いを投げかけるのは、何もこのテキストだけのことでなく、ブルトン自身が以前から抱えていた問題なのである。1916年8月以来、自身に感じている矛盾を前にして、彼はテオドール・フランケルに次のように書いている。「ああ！ しかし私は誰なのだ。」1920年10月24日に、彼は同じようにシモーヌ（彼の最初の妻である）に書いている、「私は誰なんだ。」「常に同じであるためにあなたはどのようにしているのか。」と彼女に9月27日に尋ねた後である。『失われた足跡』のいくつかのテキスト、1924年の『シュルレアリスム宣言』は、この質問が年とともに深まっているのを明らかにしている (PI p.1523)。ちなみに、『サイコ』においてノーマンは、他者である母親の欲望に支配され、同一化される。母親の仮面をかぶった母親の代弁者という立場であり、ここにおいてノーマンは自分の仮面をかぶった自己同一性を永遠に喪失することになる。

